

## 5. 野洲町久野部遺跡 七ノ坪地区調査略報

阪急電鉄株式会社の宅地造成に伴う、野洲町所在、久野部遺跡七ノ坪地区の調査は、51年6～7月に実施した試掘調査に引き続き、本年2月末から第2次調査を実施し、現在も継続中である。

今次調査は、試掘調査で遺構の存在が確認された部分について、幅10mのトレンチを10m間隔で設定し、遺構の検出された部分を順次拡張する方法をとった。現在までに発見された遺構は、調査区西端で弥生～古墳期と思われる溝が数条と若干の土壌（A区）、同北端で平安期と考えられる溝が数条、掘立柱建物1棟、土壌およびピット多数（B区）、同中央部で沼沢地に流入する奈良前期の溝1条（C区）などである。このうち、弥生後期の良好な一括資料を出土したSD2を含むA区を中心に、その概要を報告することにした。

### 1. 遺 構

A区は調査区の南端に所在し、その西隅において、数条の溝および若干の土壌が検出されている。溝は、複雑に蛇行しており、部分的に切り合いが認められる。

#### 〔SD1〕

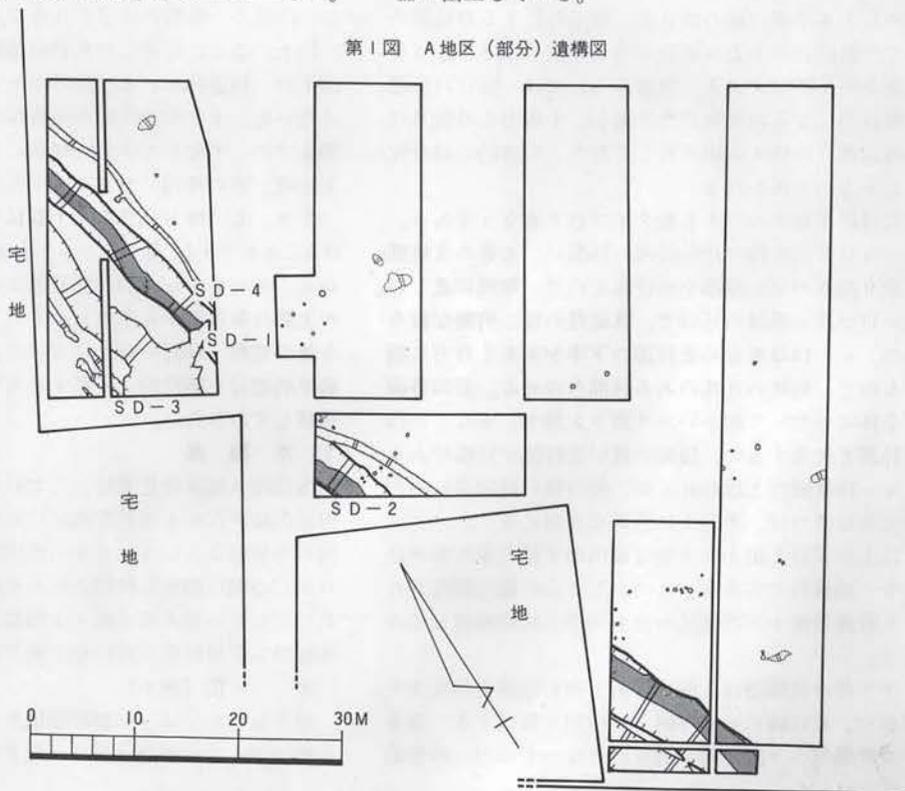
SD2を切りながらSD3の東を南から北に蛇行する溝で、ほぼ上・下2層に分けられる。上層は、黒色粘土層でほとんど遺物を含まない。下層は、暗灰色粘質砂土からな

り若干の遺物を含んでいる。幅1～1.5m、深さ20～30cmで、一応、古墳時代後期の一時期と推測される。

〔SD2〕 SD1に切れ、ほぼ同方向に蛇行するU字溝で、巾2.5～3.0m、深さ90～100cmを測る。大きく3層に分かれ、第I層は淡青灰色弱粘質土（③）よりなり、第II層は砂層と粘土層の互層（④～⑥）よりなる。第III層は、青黒灰色粘質土（⑧）で底に若干の礫層（⑨）が堆積する。礫層からは、ほとんど遺物の出土はなく、第I、第II、第IIIの各層より畿内第V様式並行期と考えられる遺物が多数出土している。（後述）

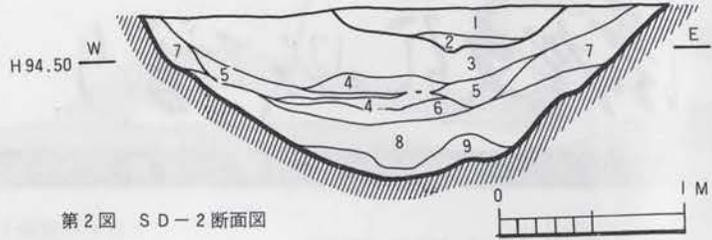
〔SD3〕 SD1の西をほぼ並行して南から北に蛇行する巾2.5～3m、深さ50cmのU字溝で、一部でSD1、SD2を切っており、これらより新しく掘削されたと考えられる。大きく3層に分かれ、第I層は淡青灰色の粘質砂土、第II層は淡青灰色の砂礫土、第III層は黒灰色の粘質土からなる。遺物は、第II層以下に検出され、土師器とともに6C末～7C前半の須恵器が出土している。

第1図 A地区（部分）遺構図



〔SD4〕 SD2の東を、ほぼ並行に南北流する溝で、巾50~60cm、深さ30~40cmのU字状を呈している。上下2層に分かれ、上層は淡灰褐色の粘質土、下層は淡青灰色の砂泥からなる。遺物は少なく、性格は今少し明らかではない。

(大橋信弥)



第2図 SD-2断面図

## 2. 土 器

この調査では、弥生時代から平安時代までの土器が多量に出土している。このうち、比較的整理の進んだSD2出土の弥生式土器の一部を紹介したい。

壺形土器には長頸壺と小型壺がある。e-1、e-6はともに器体外面をハケ状用具で成形（以下「ハケ目調整」という）しているが、e-1の筒形の口頸部は上位でさらに大きく外反し、端部を丸くおさめる。肩部外面にへらによる記号状の文様を刻む。一方e-6はや、大型で、口頸部も太身の感がある。口縁端部はや、内傾気味の幅のせまい面をもつ。なお、器体外面のハケ目調整はe-1に比べて細かく、内面も縦横に板ナデ・指ナデを加えるなど、全体に丁寧な仕上げである。e-2の小型壺は球状の体部に朝顔状に大きく開く口縁部と突出した安定感のある底部が付くもので、器体内外面に細かいハケ目調整を施す。

甕形土器には肩の張りが小さい体部から「く」字状に外反する単純口縁の甕Aと、鋭く外反する口縁部の中で屈曲して上方へ直立する受口状口縁甕と呼ばれる甕Bの2種類がある。甕Bについては一様に口縁部に櫛状具による刺突列点文を施し、I層出土の甕Bは口縁端部に内傾する面を有しており、形態的に細分化されるものと思われる。

高杯形土器についても数タイプ存するようである。e-5は受部を持つ比較的深い杯部に、太身の支柱部と余り開きのない裾部をつけるもので、類例に乏しい。e-11は浅い皿状の杯部で、体底部の境に明瞭な稜を持つ。e-13は太身の支柱部の下半が大きく外方に開くもので、椀状の丸味のある杯部をのせる。器体外面は全体にわたって細かいへら磨きを施す。またe-12は杯部を欠失するが、筒状の長い支柱部が特徴である。

e-19は器台と思われるが、幅の狭い外端面に円形浮文をはりつけ、その上に竹管文を加える。

以上のSD2出土の土器は畿内第V様式並行期の良好な一括資料であるが、この点をさらに最近調査された久野部遺跡十ヶ坪地区の出土例等と比較検討してみよう。

十ヶ坪の長頸壺は3例のうち2例が端部を外反させており、直口縁の七ノ坪例とは様相を異にする。残る十ヶ坪例はへら記号状文様を持たないものの、形態的

には七ノ坪例と酷似していると言えよう。しかし七ノ坪にも中河内（大阪府）西ノ辻I式に見られる、体部と同比の口頸部をもつ長頸壺がなく、それより新しいものと考えられる。

つぎに甕形土器についてであるが、十ヶ坪に見えない甕Aは無花果形の器体に強く短く開く口縁の西ノ辻I式より後出的で、球形の器体をもつ中河内北鳥池よりは古い様相を備えている。甕Bについては、既に十ヶ坪において確実に畿内第V様式に共伴することが明らかにされたが、七ノ坪でもこれを追認することができた。これによって、一部において混乱さえ生じていたこの種の甕の変遷に確かな資料を提示できると言えよう。

終りに高杯について見れば、七ノ坪例は、大きく外開きする口縁の十ヶ坪例より先行するものの、西ノ辻I式ほど口縁部が立上らず、やはり畿内第V様式の新しい段階の一時期に比定されるであろう。

以上、ここに紹介した久野部遺跡七ノ坪地区SD2出土の一括遺物は、まだ整理中という点から確言は控えたいが、十ヶ坪地区例と同時期から一部先行する時期までの、すなわち中河内地域における「鬼塚」～「上小坂」期の枠内におさまるものと判断される。

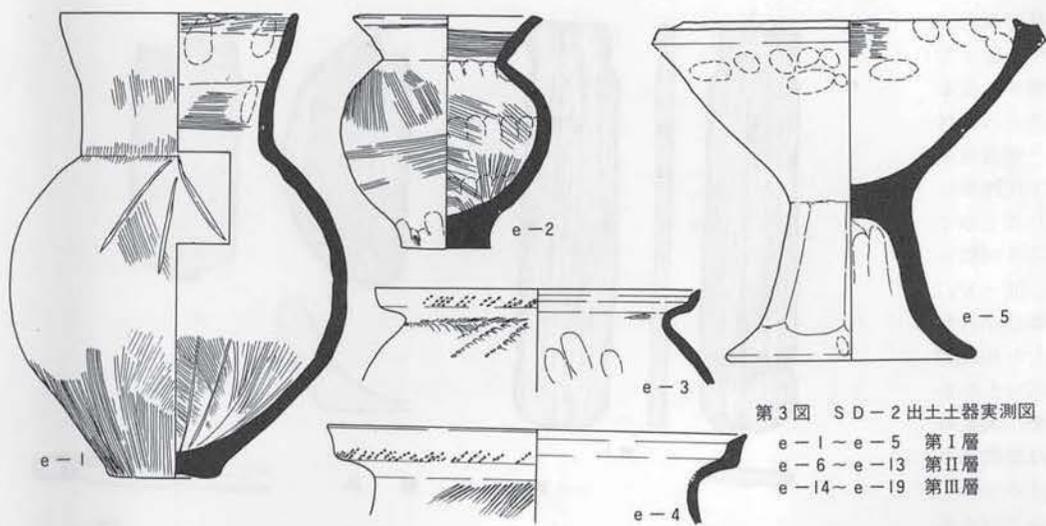
なお、七ノ坪SD2出土土器は層位的には3層に分けることができる。e-1~e-5は最も安定した第I層から、e-6~e-13は第II層から、e-14~e-19の土器は第III層から出土したものである。したがって、今後の整理・検討いかんによって、七ノ坪出土土器の編年的細分を層位的に確認する可能性が存することを付言しておきたい。（別所健二）

## 3. 木 製 品

当遺跡A地区の北東は、しだいに比高を減じながら旧沼沢地の広がる通称C地区に至る。つぎに掲げる3例の木製品は、いずれもその沼沢地に流入する溝（SD10）の開口部から検出されたものである。伴出したおびただしい量の須恵器・土器によって、これらの木製品も7世紀前半の所産と解されよう。

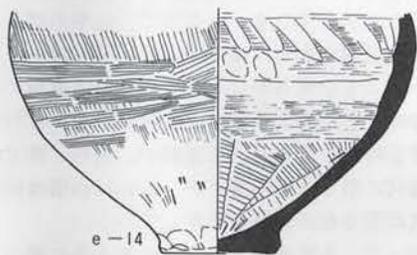
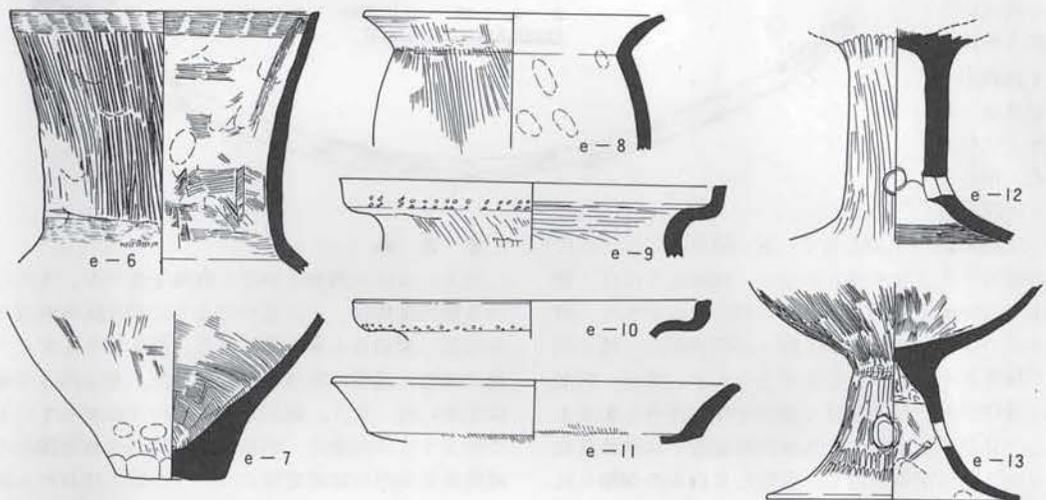
### 大 足 (W1)

田下駄と大足は、形態が類似しており明瞭には判別し難いが、その用途は異り、前者が田植えや稲刈りの



第3图 SD-2出土土器实测图

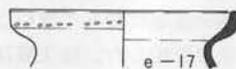
e-1~e-5 第I层  
e-6~e-13 第II层  
e-14~e-19 第III层



e-14



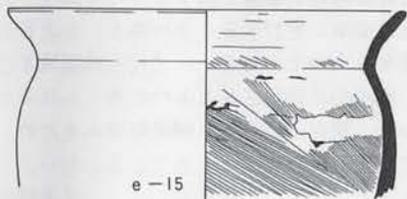
e-16



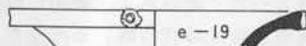
e-17



e-18



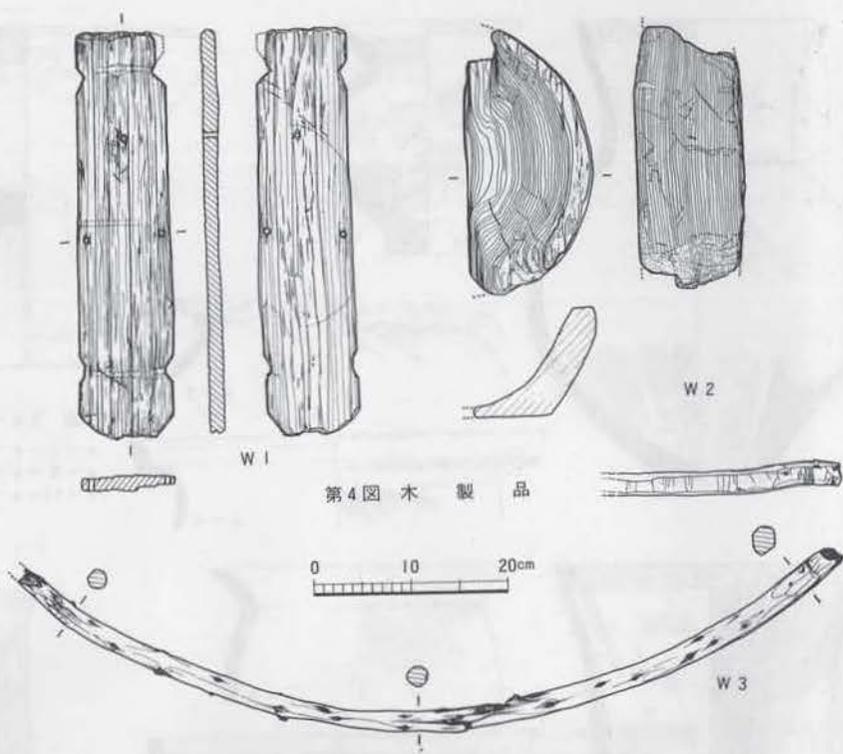
e-15



e-19



際に足が湿地に沈むのを防ぐため考案されたものであるのに対して、後者は主として代踏みに供されたものであることが知られる。従って、田下駄は浮力を期待した比較的幅の広いものとなるが、大足の場合には堆肥等の埋め込みないしは泥をこねる必要から細長いことが要求されよう。今回検出した木製品は、43×9cmと比較的細長く、中央には足との固定を



意図した鼻緒孔が3孔穿たれている。前緒孔には、古代下駄に通有の片よせが見られない。両端近くには、静岡県山木遺跡出土の大足のように切り込みがあり、裏面3か所で確認される棒状圧痕との関連から、枝を利用した杵をとりつけていたと考えられる。最近、新旭町森浜遺跡から、枝を曲げた杵が本体に遺存したままの状態で見えられており、本体の両端近くに穿たれたおのおの2孔に樹皮を通し、固定しているのが知られる。その他、端部には取りなわをつけたためかとも思われる痕跡が認められた。

#### 片口 (W2)

約半個体分を欠損しており、その全様は定かでないが、復元径30cm余、深さ11cmを測る。当初は鉢とも考えられたが、一端が他端に比して厚いことに留意し、一応、片口の用途を想定した。加工痕は明瞭ではないが、細部加工に際して鉄利器の使用を彷彿させる。

#### 丸木弓 (W3)

径2cm前後の枝を払っただけの簡易な弓である。わずかに上端を欠損しているが、下端は遺存が良好で、数か所を下方に向かって薄く削り出し、掛り部を作り出して弦をかけていたと思われる。側辺には弦の圧痕が数条認められた。弥生時代以降、その主たる生産活動を水稻農耕に移した後も、このような旧態依然とした労働用具を用いて、狩猟もまた延々と続けられていたことがうかがわれる。(谷口 徹)

#### まとめ

以上、A区の調査を中心に概略を述べた。A区における検出遺構は、上に述べたように調査区の西端を南から北へ横切る4条の溝であり、溝を境としてその東側には全く遺構は検出されなかった。東に向って地山は次第に低くなり、沼沢地状のものが広がっている。このような沼沢地は、昭和40年に調査された国鉄の富波電車基地内や富波遺跡についての数次にわたる調査でも確認されており、この付近一帯に低湿地が広がっていたことを示している。ところで、近年の調査によって、この低湿地をとりまくように、多くの集落が発達していることが明らかになっている。沼沢地の北東には鎌倉時代を中心とする富波遺跡が、北には弥生中期から平安時代に至る五之里遺跡が、南西に弥生末から平安時代に至る久野部遺跡が、南には古墳後期から平安時代に至る和田遺跡が位置している。

したがって、A区西端を南北流する4条の溝は、おそらく久野部遺跡の東限を画するものであり、B区で発見された条里に並行する2条の溝も、五之里遺跡の南限を画するものであって、いずれも低湿地を念頭において、計画的に掘削されたものと考えられるのである。しかし、調査は現在なお継続中であるため、詳細についての報告は今後にゆずることにしたい。

(大橋信弥)